

## 【史料紹介】

# 「佐々木高行日記抜書」

齋藤 伸郎 編

## 一 解題

本稿は、宮内公文書館蔵「佐々木高行日記抜書明治24―30年」（以後、佐々木高行抜書）識別番号3513を翻刻したものである。本史料の原著者の佐佐木高行（一八三〇―一九一〇年）は、土佐高知藩士で、幕末の志士、明治の政治家である。明治前期は、参議・工部卿・元老院副議長を務め、枢密院発足と共に枢密顧問官に就任、逝去まで勤めた。

佐佐木の最大の業績はその遺した「日記」<sup>2</sup>である。編纂がされているので、日記ではなく伝記資料と呼ぶべきと主張する研究者もいるが、本稿では日記と呼称する。現在、それらは『保古飛呂比佐佐木高行日記』『かざしの桜』『明治聖上と臣高行』などとして刊行され、宮内公文書館他でも楷書やタイプで書かれた所蔵史料の多くがウエブ公開されている。その中で、他の日記とあまり重ならず、ペン書で読みにくいためかウエブ公開されていないものが、今回紹介する「佐々木高行日記抜書」である。

佐佐木は、政治の第一線から離れた明治二二年に常宮昌子、翌年に周宮房子、二人の内親王の養育主任となった。<sup>③</sup>佐佐木は、両内親王の状態を報告するため宮中へ出入りし、その際見聞きした政界の機密を書き留め、原編者とその膨大な日記群から書き抜いたのが本稿である。第一次山県内閣末期から第一次松方内閣期の混乱、日清戦争の始まり・終わりなど、日数にして十四日間・本文約六十（約一二〇頁）と大部ではないが、天皇および天皇側近の肉声を書き出した貴重な記録である。特に明治二四年の三日間の記録は初出で、二五年の二日間も一部が引用されただけである。<sup>④</sup>

原文は終始、佐佐木の一人称で書かれ、對話者の言・伝聞が混乱するため、本稿では発言単位で話者名を記した。第一次松方内閣時の選挙干渉の際に伊藤博文枢密院議長と品川弥二郎内務大臣との間で激論があったと伝えられていたが、典拠不明のため「風説」説が唱えられていた。<sup>⑤</sup>今回、本稿二五年三月一九日条で見出し、話者整理の過程で天皇の言であることがわかり感動した。<sup>⑦</sup>

原編者津田茂磨<sup>⑧</sup>をして「秘中の秘」、赤裸々な記載が今後の研究に役立てば幸いである。

## 二 凡 例

翻刻にあたっては、史料の原形をとどめるように留意したが、以下の点については改めた。

- ① 漢字は現在、一般的に使用されている字体を使用し、変体仮名は現代仮名に改めた。
- ② 適宜、句点・読点・並列点を付した。くの字点は直前の文字を繰り返し、合字は開きひらがなとした。
- ③ 誤字・脱字には「」で案を示すか、「ママ」を直後に付した。姓のみの人名には「」で名を付した。わ

かりにくい読みは直後に「」で付した。それらが繰り返される場合には、初出分のみに付した。

④ 闕字・平出は詰め、発言者単位で改行を排し追い込んだ。その上で、適宜、改行・字下げを施した。

⑤ 固有名詞は一般的な記載に統一した（例…魯↓露、山縣↓山県）。付箋のついた語彙は「\*」を付し、行末に付箋の文を付した。原文中にある二行書の説明は直後の《》内に一行で付した。原文に一箇所ある空白部を□で原稿用紙のマス数分付した。

⑥ 佐佐木および対話者の姓を最初の文頭に「」で付した。

⑦ 今日から見て不適切な表現があるが、史料の性格上そのままとした。

翻刻は編者齋藤が慶應義塾福澤研究センター重田麻紀氏のご協力を得て行った。最終的な責任は齋藤が負うものである。

### 三 史料「佐々木高行日記抜書」

〔背文字〕 侯爵佐々木高行日記抜書

〔表紙題簽〕 侯爵佐々木高行日記抜書（「抜書の下に小文字・年毎改行で」明治二十四年 二十五年 二十八年三十年

〔中表紙 表〕（丸秘印）明治天皇と佐佐木高行侯爵）丸秘 大正元年八月 津田茂麿 謹写（〔枠外に〕五十八枚 壺

〔中表紙 裏〕本書は佐佐木老侯が恐れ多くも先帝陛下に拝謁の時、種々の御沙汰有之候を書留め置かれたるを同

候の日記の中より密に抜き書きせしものに付、秘中の秘なり。

大正元年八月 茂麿 謹記

〔本文〕『佐佐木侯日記の一節』

明治二十四年三月九日晴（月曜日）

〔佐佐木〕午前九時半より参内。十一時頃より拜謁被仰付候て、両宮〔常宮・周宮〕の御模様、大磯にての御都合等詳細申上候処、大御満足に被為在。

〔天皇〕御沙汰には、其許も追々老年にも相成候事とて、両宮も無際限世話も大義ならん。徳大寺〔実則〕とも色々申談じ、満六歳迄養育致呉度。夫より学校等の都合も不致ては不相成。今日の処にては高輪の殿中へ教師を呼寄せ、為学候ては如何哉。教師は婦人宜敷候ハバ、下田歌子にては如何哉と存候へ共、今日より申候ては、又々頑固杯申出候間、今より篤と堪考致候。

〔佐佐木〕高行、申上候は、御尤なる御事にて、皇女に被為在候得ば御学問・御十分御出来無之とも、御体裁上、御高尚に被為在候哉、第一と奉存候間、女学校へ御通学之処は能々御賢慮被為遊候方可宜。又、皇女の御天質に随ひ、御教育も御施候不相成とは御不都合と奉存候間、御六歳迄に能々御親み被為遊御生質を十分御弁への上は、いか様共被遊方被為在候と奉存候。一体、女子の教育は六ヶ數、今日は随分弊も有之候様承居候間、其辺は至極御大事と奉存候。尚、高行も、追々愚慮も可申上候処、

〔天皇〕尤なる事なり。女子の教育は六ヶ數様子にて、生意氣に相成候弊不少と聞候事も有之、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、先達来、三条〔実美〕・元田〔永孚〕、不幸にて老功の向も追々世を去り、恐縮之段申

上候処、

〔天皇〕其通也。若者は学問も出来、口を利候得共、兎角経歴無之候に付、老功の者は間に不合様なれども、大に見る処あることにて、甚だ可惜事に有之候。

〔佐佐木〕高行杯は、別て心細き事に御座候と申上候処、

〔天皇〕御歎息被為遊候。

〔佐佐木〕又、内閣ハ此頃如何の成行に候哉と奉伺候処、

〔天皇〕御沙汰に、不相替六カ敷候。山県〔有朋〕と伊藤〔博文〕と益々不熟と相成申候模様なり。又、松方〔正義〕も辞表の内心の由、吉井〔友実〕より内々聞申候。松方は伊藤の内閣に入不申ては、逆も山県とは共に出来ざる事の様子。山県の陸奥〔宗光〕を入閣為致候儀は、最初より不服の由。伊藤も其辺にも幾分歟、不面白感触有之候様子に相聞候。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、松方、今日辞職致候ては、甚だ不宜と愚考仕候。

〔天皇〕御沙汰に其通り。松方只今引入候ては、不可然と相考居候。吉井は、最初松方も休職にて宜敷と申居候。矢張り薩人は陸奥には不服ならん。山県は陸奥を十分手下に遣候心持なれども、決して遣はれず。既に後藤〔象二郎〕に陸奥は同心の模様にて、其事は大山〔巖〕杯も不平の由なり。陸奥の儀は、最初十分に山県へ申聞候事も有之候へ共、是非とて採用せり、大に失策にてありし。伊藤も一昨日、総理大臣迄辞表出候由、議長は兼て初議会中と断居候事なり。され共まだ閉会の式も不行に辞表を差出候事ハ余り早々成事と存候。一体、才力は有之候へ共、ドコドコ迄踏詰候事は出来ず、直に飽き安き事にて困るなり。

〔佐佐木〕高行、申上候は、伊藤は大久保杯の如く国家柱石の風に乏敷才力は十分有之候へ共、踏詰無之は短所と

奉存候。

〔天皇〕御沙汰に其通なり。併しなから今日は、伊藤は、才力を以て何事も料理致候事ハ一人なり。夫故、他よりも、総理大臣になれ、議長になれとか、又、此頃も黒田〔清隆〕より内大臣になれ、と申居候由。伊藤も種々他より申勧められ候には困ると申居候。黒田の勧め伊藤は、黒田、自分に内大臣を志願に付、態と博文を勧め候と申居候由。黒田を内大臣に致候ても、又は酒狂等致候ては不都合と相考候。

〔佐佐木〕高行、申上候。御沙汰の通にて、内閣大臣は返て宜敷候得共、内大臣にて君側の重職が酒狂致し、或は不品行等有之候ては、君徳にも自然関係致候間、御採用は決して不可然。内大臣は格別才力も無之して宜敷候間、寧只今通り徳大寺の方宜敷と申上候處、

〔天皇〕尤に御聞被為遊候。又、御沙汰に、伊藤は才力に任せ随分我俣に有之候。今、伊藤位の人物有之候ハバ、互に相制し都合宜敷候得共、其人無之候。何分人物ハ乏敷物に有之候、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。才が有之者は、兎角右様の弊有之候事に付、何分頑固にても忠直の人物追々御採用の儀、肝要と奉存候。

〔天皇〕其辺は何も御沙汰無之。尤もなりとの御気色に被被〔ママ〕為在候。

〔佐佐木〕又、申上候。此度議會にて痛く節減致し候に付、行政上困難〔な〕りと奉存候。

〔天皇〕御沙汰に、松方より聞く処にては、さのみ困難ハ無之。松方は兼々此の位の節減にて差支無之見込なれ共、各大臣六ヶ敷不得止、予算相立候段申居候。乍併、官吏減少、又は、俸給等は余程減じ可申。其辺ハ幾分歟困り候廉も可有之候、云々。

〔佐佐木〕因に記す。乍恐、聖上には、急進政略は御好不被為在候得共、維新來の行掛にて、又、内閣に自ら急進

の勢力有之候事にて、岩〔岩倉具視〕右府には其辺には余程注意ありたれとも、十分不被行。右府、今日迄在世にて、世の風潮大分替りたる折柄なれば、十分意見も伸〔申〕しならん。乍併、今日迄の処にて聖上の御沈着の思召無之世の風潮にて、御輕率の思召に候ハバ、如何の弊害を生したらんと冷評するなり。只々、時の勢にて政權の對する処、如何共難致。高行杯、微力短才にて、歎息而已。去迎、万分之一の御助にも尽力するは臣子の分なれば、時々意見ハ申上たり。元田翁在世の時ハ、同翁ハ能く御信用被為在候て、実着の説は日々申上候事にて、御参考に相成候と奉恐察候。今日よりは如何哉。何分共、伊藤の説を専ら御聞被為遊候事に相成候ては、或は如何哉。尤、伊藤も近來は昔日の如くには無之候。

〔天皇〕聖上の御口氣に、壯輩は學問も出來、議論有之候へ共、何分経験に乏敷、実行上には、毎度退却之事となり。又、御沙汰にも、自分は頑固論と見做され杯、

〔佐佐木〕御心の程ハ、十分恐察出來候事にて恐縮慨歎之事なり。臣子たる者、一部分にても尽し報恩の念、不可忘、謹書。思召にて書棚一台下賜相成候事。

四月七日（明治二十四年）

〔佐佐木〕午前十時参内。十一時過より拝謁被仰付候二付、両宮御種痘の始末、申上候。跡にて内閣の模様奉伺候処、

〔天皇〕山県・伊藤の中、益々不熟の模様有之候。

〔佐佐木〕又、相伺候ハ、山県辞表云々如何に候や。

〔天皇〕御沙汰に、過日、井上〔馨〕よりも山県は辞表を差出し候哉との事に有之候へ共、まだ差出不申候。山県

は突然とは差出し申間敷。一昨年、伊藤の辞表之節、山県云、伊藤は突然と、宮内大臣・又は元田等へ向け、相願差出し候儀、甚だ不躰にて、内閣の順序も不経候と申居候故、愈辞表差出候場合には十分手を尽し可申と被考候。

又、御沙汰に、総理大臣と申しても、各大臣と権力も格別違ひ無之、只今の向にては、誰れか総理にても六ヶ敷。何歟、議事席の如く多数決とか、何歟、権力の帰する方法有之度も相考候へ共、何分同力同才の向に候へバ、何事も被行不申。三条・岩倉の時に候へば、自然と他より尊信する有様なれば、事々決定も致し候得共、今日は何事も彼所・此所へ問合、殊に外国に関する儀は、六ヶ敷事に有之候。右様の景況に付、伊藤を総理に任候ハバ、可宜との考も有之候由。伊藤は貴議院議長を止候ては、逆も同院の纏も附き申間敷と一方よりは申立、枢密院議長も大木〔喬任〕にては不服の人も有之。伊藤を枢密院議長にと申候人も有之趣。いかに伊藤にても、一人にて兼務も出来不申。右様の景況にて、伊藤も氣高き事にて、欧州にては「ビスマルク」、支那にては李鴻章、日本にては自分と愈大天狗と相成候。伊藤は清国行と申居候処、此頃は、何分只今の外務大臣の外交政略にては、清国にても何事も出来不申とて、先以中止の模様なり。伊藤、大天狗と相成候に付、井上毅も天狗となり山県杯の事は聞入れ不申由。續て伊東已代治・金子堅太郎杯も小天狗と相成候由。段々と如此事に候得は、中々六ヶ敷。依て相考候には追々能き人物を見立、役立候様に致度と存候へ共、今に考も附き不申、云々との御沙汰、実に恐縮之至に有之候。〔佐佐木〕高行、申上候は、伊藤も才智は有之、其他も才智有之向も可有之候へ共、国家柱石と申候人無之甚候。恐縮之至に奉存候。何分、其忠直成人物にて才智は少し不足候ても、所謂、古の大臣の風有之者精々御縮被為遊度。今日は兎角才士而已にて、忠直人は頑固視被致候風にて、実以不安と奉存候。世の風潮は致方無之。何分共、柱石と相成候人物御養成御採用之儀、肝要と奉存候、申上候。其辺は、御承知に被為在候と奉恐察候へ共、思召之通も不参敷。只々御答而已也。又、高行申上候は、此頃、西郷〔隆盛〕生存候様、各新聞上に相見え候。如何思召



候哉。

〔天皇〕御沙汰に、是れは国会も閉会と相成候て、新聞屋も隙に相成候故、右様の珍説を掲載致候事ならんと申事に候。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、御沙汰の通ニ可有御座。尚又、今日は、何党も党派外の者も政府を攻撃致候事ハ面白く聞え候間、種々の説申立、政府の困難不人望に相成候事ハ、誰々申唱候場合に候得共、右様の風聞一度相立候上は、頻に騒々敷申唱候て、兎角、人心の安堵不致様の事而已に悦候人情と相成、実に歎息の事に御座候。畢竟、政府之人望無之候より来候事に有之、如何共不相成。

〔天皇〕御沙汰に、其是の事情も十分可有之と存候、云々。

〔佐佐木〕其中に御用被為在候ニ付、退出。

九月二十六日（明治二十四年）

〔佐佐木〕午前十一時前より参内。拝謁相願候処、土方〔久元〕宮内大臣拝謁中にて、十一時過より被召出、両宮御滯晃〔日光〕中の御模様等、詳細申上候。其節、内閣の模様

〔天皇〕御沙汰に、被為在候官制改革にて官紙廃止候処、儀式上秩序不相立候間、其調申聞候処、位階を以て相立候との事に候得共、今日の位階は功勞にも非ず。華族は年序に相達候故、老功の者も返て若年の無功の者の下座と相成。又、給高に致候とも場所に寄り、給は少なくも地位高く無之ては不都合の場合あり。依ては、改制に應じ不都合無之様取調候様申聞候処、まだ何共方法相附ずグスグス致居候。又、陸軍大臣は武官に非ずは採用無之規則之處、此度の官制に文官にて差支無之と相成候。武官中より異議差起り候処、右規則は松方も不相心得、高島〔勲之

助〕陸軍大臣へ松方相談致候処、高島も不心得とて頗る不都合と相成候故、前に引戻し候筈に相成候場合、海軍武官より、海軍大臣も海軍武官より相任じ、他よりは不任、陸軍同様に致度との事に候処、海軍は一体に人少にて、今日、樺山〔資紀〕も陸軍より転し候人也。若、樺山退職の時は仁礼〔景範〕・中牟田〔倉之助〕の外無之、仁礼も最早、老衰にて御用に不相立。急差間候間、海軍大臣ハ是れ迄の如く致し候方可然と申候ても、中々六ヶ敷。陸海共顯職の将官と申事にては人物も差間候とまだ評決せずグスグスと致居候。其他何事も相運不申。松方にては迎も総理は六ヶ敷歟、山県の方なれば窮屈なる生質なれ共、難場ハ押切候得共、松方にては夫れは出来ず、只々因循に打過候。世上にては今日、内閣は円滑に相纏候様申趣に候得共さにあらず、畢竟、各大臣も冷淡にて反対を以て議論致候。人も無之、去迎、松方の指図は不変、何とも不相分候。松方も自分の前にては、御尤と受致候ても、内閣にては、又々押返され、板挟みにて大困却の様子なり。伊藤にも、充分補助の儀申聞候へ共、一々注意も行届かずと申居候。

又、陸軍より武官にても予備の人へは、葬式の節、儀仗兵は不差出様致度申出候。素より文官も同様にて、右様相成候ハバ、特に儀仗兵を被仰付候事に相成、是も特にと申事は夥多相成ては不都合とて、其違も議論中なり。右武官予備云々も、谷干城・鳥尾小弥太・三浦梧楼・曾我祐準等、行政上の事に意見陳述致候より、巖敷相成候。谷が行政上の事に關係せるを佐官以下に候得ば、軍法會議に可致筈に候処、何分其訳にも被行がたきと大山陸軍大臣申出候間、為にても誰にても法律を侵候上は、法律通取計可然と申聞候へ共、大山も大に心配致候て、遂に着手せず。佐官以下は遠慮なく取計候事不都合迎、右面々は予備にて行政上、關係差支無之様の姑息の取計相成候。夫より色々と差支出来候事不少候、云々。

〔佐佐木〕高行申上候、独り武官不而已、文官にても功勞等有之候者は官吏懲戒令を侵者も其俣に相成候様に時々

相見候。依て、愈我仮勝手の向も無之とも、難申上其辺も法律通り御処置無之ては、以下以下〔ママ〕の者共、感触悪敷、自然一体へ被対御威令も不相立。いつ迄も功臣へは御優待に相過候と奉存候。

〔天皇〕御沙汰に、文官の儀は黒田総理大臣の時、法律通処置可致筈に相成居候へ共、種々混雜中其俣に相成居申候。又、御沙汰に大臣中にも、大木は不相変、枢密院議長の如き事也。田中〔不二麿〕は何も出来ざる様子。後藤は不勉強の処、此頃は太分、肩を入候様に相成候由、併し何とも申兼候。陸奥は才士にて色々致候へ共、何党何派にても自分の都合能き方に相成、宛に不相成。品川〔弥二郎〕は精神宜敷候へ共、病氣故に何事も差控候事にて候。其他は格別無之、惣体議論もなく只々不運にて日送候。連も大臣に任せ候事は出来ず。夫故、色々心配致候儀、既に前申候通、陸軍大臣云々にて松方も高島も規則等は不知事にて申聞候と驚き居候位也。松方は大蔵の事は相心得居候得共、陸海の事は知らず。高島も明治六・七年迄侍従致居候て、陸軍の事は存分不心得に有之候模様にて、自分より規則等、教へ遣候と御笑被為遊候。又、松方も総理出来不申。尤、伊藤・黒田・山県三人も実は充分出来不申事に候得共、今日は誰にても六ヶ敷、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。松方杯は実着に候へ共、大臣の中には或は十分力を入れ、総理大臣を相助け候人乏敷様に奉存候。此上は忠直なる人物御採用被為遊候ハバ、業出来不申候共、其の精神にて相運可申上奉存候。何分當時の政事家杯中には多く才士にて、忠直の人乏敷候間、差向何某とは申上兼候得共、御撰任御肝要と奉存候。

〔天皇〕聖上、御うなづき被為遊候。

〔佐佐木〕其中十二時半に相成候間、退出致候事。右、御沙汰中書取候分、御沙汰に法制局長も井上毅は和漢の事も取調候へ共、只今の尾崎三郎〔良〕は英国而已手本に相立候て取調候故、何分満足の事無之、内閣の助に十分不相成様に相考候、云々。

十一月四日（明治二十四年）

〔佐佐木〕午前十時参内。十一時二十分より拝謁被仰付候に付、両宮御避寒地奥津清見寺の外、差向無之に付、同所へ御取極之儀申上候。夫より何角、御沙汰被為在候。

〔天皇〕御沙汰に、松方も、兎角グスグス致候て決断に乏敷候。此頃、尾濃震災地救助金之儀も、両之度催促致候て、漸く発令に相成候。其節、品川内務大臣も大に困却と申出候位に有之。其震災地より帰候節は、早速発令致候候模様之処、如何致候哉。大に因循致候。

〔佐佐木〕高行申上候、是は法律論の為に延引致候歟と奉存候。

〔天皇〕御沙汰に、左にて無之模様縮る所、不決断之事と被存候、云々。御沙汰に、伊藤も逃行き、又、井上毅も鎌倉行と申し、伊東已代治も旅行と申事に相成候処、開院中憲法上之儀に付ては、伊藤・井上、伊東、下地〔たじ〕より関係致候事故、開院中皆々逃行候ては不都合と存候間、井上・伊東ハ旅行致さぬ様子申聞候。其れは松方より井上を能々遣ひ候様相成候ハバ、好都合と存候故也。井上毅も天狗と相成候間、伊藤の外には誰一人も頭を下げ候人無之申す景況に候故、松方にて十分遣候事は六ヶ敷候得共、何分大久保利通の頃より内閣の機務にも関係致候事故、其心得無之ては不相成候と松方へも申聞候処、井上も先以、尽力の模様有之候。

御沙汰に松方は正実に候得共、同人を相助け候人有之候ハバ、大に都合宜敷と存候得共、当今一人も無之様に被存候。陸奥は相助け候様に相見え候へ共、同人は我が名譽を得候歟、利益有之節は西へも東へも替候故、決して松方を真に助け候事は無之。亦、松方にては引廻し候事は出来不申。後藤を宛に不相成、大木は何も不致候、品川は直に癩癩を起候て、孰も十分に談話出来ず。過日も、品川は辞職云々との事也。右の如くにて、甚だ六ヶ敷事成、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。今日は十分の人物も得難く亦、誰にても六ヶ敷場合と奉存候間、内閣之主義一定致候てドコドコ迄も押貫き候ハバ、善くも悪しくも方向相立候得共、是れ迄之事にては、主義相分り不申故、高行杯も何方へ味方致候て宜敷敷、不相分。何分一定の方向相立候儀、肝要と存候。

〔天皇〕御沙汰に、松方はドコドコ迄も不撓の精神有之様に相見え候得共、何分不決断にて先途の目的乏敷候、乍併、伊藤の如く昨日の儀、今日、俄に替り候事ハ無之。松方は縮り因循と相成候。其因循は事由不明より来候と被存候、長州は概して才智に長し、薩人は概して正撰なり。山県・山田両人は、長人の中には違ひ候得共、能々見候時は矢張り長人の生質有之候趣に被存候、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候は、御沙汰の通り長短は有之事にて、中々兼備の人は無之事に候候得ば、其長所を御遣ひ被為遊候儀、御肝要に候得共、当今の景況、人心も日々浮薄に相成候場合に付、先以正直に真面目の人を以て内閣を組織致候方敷と奉存候。勿論才智之人も今日は無之ては不相叶は申上候迄に無之候得共、基礎は正直にて信用有之人物を重に推候と奉存候。いか様の儀有之候ても内内〔ママ〕閣確乎と致し信義を以て天下を駕馭致候ハバ、可恐事は無之と奉存候。

〔天皇〕御沙汰に、内閣一定致候ハバ、勿論何事も出来可申候得共、兎角六ヶ敷事而已にて、一定に至り兼候。伊藤は才智なれども時々変説有之、いつ迄も仕通候事ハ出来ず。黒田は十分分らず、山県は短慮にて直に怒り易く、松方はドコドコ迄も仕通候精神有之候得共、極々鈍く分り兼候事多し、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。昔より兼備の人は六ヶ敷事に候。才智あり忠直に一身の毅〔毀〕誉に關せず尽し候人物は、稀有にて、今日より古人を見候時は、愈益感心仕候事に御座候。

〔天皇〕御沙汰に、其通り也。実に得難きは人物也、云々。

〔佐佐木〕右の外にも人物の儀、又は今日の景況御沙汰之处、一々奉感佩候。因て同夜も俵〔寿〕く考候。如此聖明に被為在候儀にて候得共、内閣は兎角一定無之儀如何に、是れは全く薩長二藩の維新に大勲功有之、三条公は長州方、岩倉公は薩州方と申様に相成、薩長二藩も相互に不楽有之候得共、讓合候て相運び候事にて、其間を条岩両公にて備縫致来候事にて、聖上にはまだ御幼年に被為在候事故、万事、条・岩両公御補佐申上候。大久保〔利通〕・木戸〔孝允〕等も重立ち尽力致候得共、いつも両人の間も債〔猜〕疑は不絶と相見え候。大久保は、後に伊藤を大に用ゐ候て、木戸と伊藤は返て不熟之景況に相成候位に付、伊藤は内閣中、大久保、世を去候後は、尤権力を有し、条・岩両公も自然信頼致し有様なり。尤、十分信用は無之様にも被察候得共、他に人物も無之、欧州の学問も少々出来、才智有之。遂に憲法草案も伊藤の手に出来候等の経歴有之候事故、伊藤之生質は十分御存知被為遊候得共、兎角伊藤ならでは不相分事有之候より、自然時々御下問等被為在候。伊藤も才智有之故、難場所を避候哉とも疑候程の事も時々有之候。其辺は御存知に候へ共、右、行掛上、且、欧州の法律等能々弁じ候人無之に付、御依頼相成候。是れ黒幕と唱られ候所候也。又、他大臣も孰も伊藤の考を聞候事にて、時としては井上馨の考も聞き、黒田清隆・山県有朋に相談も致さずては不相成儀も可有之。隠居多き事とて、心配有之内閣も断然たる事も出来ケね確乎たる一定の主義夫相立被察候。聖君子の思召の俣にも不被行、甚だ恐縮の事也。高行、不肖にて、万分の一御補佐申上候事も出来ず。折を得て拝謁相願ひ、愚見申上、万々一の御参考にもと苦慮而已也。

明治二十五年三月十九日

〔佐佐木〕午前十一時半より拝謁之節、御沙汰拝承之件左に記す。

〔天皇〕御沙汰に、伊藤博文、先度申出候は、当職を辞し大成会等の者集合して政党を組織して、内閣を相助け申

度、云々。尤、此の儀は未だ誰にも咄合も不仕、松方へも一言も不申聞。近日、井上・黒田・山県等一席の節、一応申出候心組にて、此度之事は相談にては無之、云々。因て、自分申聞候ハ、申出の儀は甚以て不都合ならん。其訳は其方の是れ迄被申候には、松方総理も何分分らぬと云ひ、其他内閣大臣には拝承にならぬと申たるに其の内閣を政党にて相助け候事は出来べき事にあらず。果して其心組に候へば、先以て内閣に其許の咄の出来候人物を入れたる上にすべし。只今の俣にて政党組織致候はバ、矢張り内閣と意見違ひ、又一つの改進黨・自由兩党の外に党派出来候而已にて、何も内閣の為には不相成と考候間、思止り候様可致。自分の考には条約改正の儀に付、青木〔周藏〕外務大臣の時の行掛り有之候間、右談判を西洋に持出し、其儀を其許担当して欧州へ大使として罷出尽力すべし。今日は各国とも全權公使在留は僅兩人計に付、夫れを名にして出張可然。然る時は、其功も相見え、又、内輪も大に条約の儀に意を注ぎ可申と伊藤も右の次第は承諾致したり。依て、総理大臣初め咄合可仕との事に付、最早、自分の考は外に無之候間、篤と松方と相談すべしと申聞て退きたり。

伊藤退出後、相考候処、此度は平日の伊藤と違ひ、只々弁説に任せ喋々申出たる模様は無之。前以、松方にも相談せずと申候は、近日、松方初め黒田・井上・山県等一席設の処にて、不意に辭職の事申出候覚悟ならん。若し不意に出候時は、松方も狼狽して如何之答致候も難計と存候間、松方病氣にて引入候に付、\*岩倉具定を遣し、松方に十分注意為致置たり。

\*付箋「\*徳大寺の日記に依れば十六日（二月）宮内大臣（土方）をして松方に伝へしめられたること見ゆ。岩倉は佐佐木の聞き違ひか」

其後、伊藤、松方へ願し右辭職の儀、申出候処、松方は兼て岩倉より承知致居候故、相応の答は致候へ共、何分其答が判然せず、只々辭職して政党組織も不同意には無之候へ共、伊藤の其任は不宜杯曖昧なる答ありたる由。又、



条約云々も不同意には無之候へ共、確乎たる答無之とて、伊藤も又々スネたり。追て、黒田・井上・山県・松方杯一席\*にて、伊藤存之件申出候節も一同不同意には無之候へ共、云々と曖昧なる答に相成候由にて、伊藤愈々スネて辞表差出し候場合に立至りたり。

\*付箋「黒田・井上・方々の事實は二月二十三日の會議の件ならん」

實は自分の申聞通り松方相答候ハバ、其運に相成候哉と存候。伊藤も元田（ママ）に対し候義理も有之。自分より申聞候時は、何分強て退き候事も出来ぬ事情あり、云々。

〔佐佐木〕高行申上候。伊藤辞表に付、後藤は反対論、陸奥は賛成相成候、各新聞紙に相見え申候、如何に御座候哉。

〔天皇〕御沙汰に、後藤は伊藤の政党組織は至極不同意にて伊藤を十分駁論致候処、伊藤も尤なれとも貴兄にも申居り兼候事情有之候故、不得止との事にて、咄合纏り不申とて直に申出たり。其論は一体、政党を組織して政府に反対致居候。改進黨・自由の両党も吾が趣意を行ふ為めなれば同趣意の人にて内閣の席を含め候目的に有之。又、象二郎が先承大同派組織仕候も右主義を有之候。伊藤は今日、本人の望にて何時にても総理大臣の席は占め候事出来、既に松方も伊藤には何時にても席を譲り候と申居、内閣各大臣も異議無之儀に候得ば、政党組織致候必要なく、進んで政権を取り主義を行候事出来候。伊藤の政党論は都て不相分、云々。

又、陸奥は何共、精神の有る処不相分、伊藤の辞職云々と申候節は大に同意にて、共に民間に下り、政党組織の事を賛成すると申居候由。然るに、伊藤辞表を差出候節は、内閣にての申分は、伊藤の政党は板垣の三分の一の勢力は無党成。伊藤の政党は六ヶ敷事なりと、頻りに反対説にて嘲弄せる口氣にて、其事を井上毅が聞込候て、陸奥の反復甚敷旨、徳大寺侍従長へ内話も有之候由。昨年、議會解散の節も陸奥は猥に解散不可然と頻に申居候処、



十二月二十四日に至り、俄に今日中に解散せずは不相成と相迫り候て、松方も驚きたる由。夫れ故、解散の準備も十分出来不申由。且、内閣にて機密の評議あると直に他に洩れ、改進黨・自由兩党にも意脈相通じ候模様もあり。内閣にても大に厭ひ候得共、急に退け候事も出来ず。山県の陸奥を採用せるは、失策と内々申居候事也。尤、井上馨・伊藤博文は、同人の才智有之事に付、随分考し候模様にて、又、陸奥も才士故、内閣の事は勿論、松方の不都合之ケ条を書立、時々伊藤へ通知し、兎角、伊藤復職ならでは、何事も出来ぬ意味を申通候由。右之次第にて内閣も同人に付、困り居候場合、辞表と申事に相成候間、幸と申事に有之候も、併其意は相互に知りて知らざる風にて、陸奥も意見合はずとかにて辞したり。

又、御沙汰に松方と伊藤とは生質違ひ、伊藤は才智にて何事も運動し、其替り随分往き止り、跡戻りもあり。松方は鈍き方にて不運其替りに一日一日と漸く運候事にて、是れは畢竟兩人の生質故、致方なし。勿論、伊藤も其辺は承知に候処、近來は松方を悪敷申成し色々の不審等申立候。北海道の何会社の事は黒田の子分、重に候処、其不始末等を以、松方へ迫りたる由、松方も困却の様子也。右之如く、兩人の間、不宜は陸奥よりも色々松方の事を伊藤へ申遣し、又、井上毅・伊東巳代治よりも日々の如く内閣之失策、松方の不都合を密報致し、伊藤は右面々の書簡を山の如く蓄へ候て、過日、岩倉具定の参り候節見せて不平談承り、岩倉も驚き、伊藤も大人気なき心地せると申居候。其申にも憲法論も内閣にて見解遣候節は、松方も至極候事出来ず。伊東巳代治・金子堅太郎・井上毅の説を聞くに、右之人も時々意見違候時は、松方は只々当惑して決断無く、依ては伊藤退き候ハバ、伊藤〔東〕巳代治も辞表出す杯申居候申、何分不都合千万也、云々。

又、御沙汰に松方と伊藤と相熟し候ハバ都合宜敷と存候得共、何分其運に到り不申。松方は其心組なれども、其道筋悪敷候。其訳は、井上馨を松方より取込候て、伊藤との間を程能く周旋為致候ハバ、都合能く相運び可申敷。

なれども松方も井上は相嫌ひ申候より、イツも山県の方より、伊藤に道橋相掛け候様致候処、伊藤と山県は何分相互に不熟にて、近來益々甚敷。双方顔を見ると癩癩に障り候模様にて付、迎も松方と伊藤との間を周旋は出来ざる趣なり。又、井上毅も益々大天狗となり、伊東已代治も愈天狗となりて松方の遣れざる模様なり。山県総理大臣の節は井上・伊東も相応に被遣候由なり、云々。

〔佐佐木〕 高行、奉伺候。品川は如何の模様にて御座候哉。

〔天皇〕 御沙汰に、品川は正直なる人なれども、何分狹量にて直に切迫之儀申立、甚敷は評議中にも癩癩を起し泣き出し申候様、随分ムチャクチャなる事も有之候様子。先般、伊藤に面会の節、伊藤より議員選挙の儀等不審致し候節、預戒〔令〕を候て、県會議員とか、村會議員とか右令に相掛け候趣、相聞へ如何の事歟と攻撃致し候より、品川相激し候場合、

伊藤云、自分も辞職して民間にて政党組織せんと。

品川云、御勝手次第に候。乍併、暴激の言論も有之候ハ、貴兄とても直に預戒令に処し可申、其の御覺悟ありたしと。

伊藤大に怒り、内務大臣の職務上、此の伊藤を勝手に処分出来ずと相互に喧嘩同様の口論にて、相分候て何分不居合の由に聞きたり、云々。

又、御沙汰に、此度、副島〔種臣〕を内務大臣に任候儀、自分不可然と相考候。其訳は同人も最早、老年にもあり、何事も十分の働き出来間敷。若し不都合と相成、辞表出候時は、枢密院に帰り候事も場合に依りては相調間敷、愈民間に下り候ハバ、又々不平を申出、奇人に候得は、谷干城杯と同様の地位に立ち、又々内閣も心配増し可申と申したれども、松方より今日、他に無之と申出たり。河野の方なれば、若くもあり出来可申と考たれども、何

分、副島に被仰付旨にてありし、他日、山県が陸奥を採用して困りたる轍を踏ぬ様に注意すべしと申したり。

〔佐佐木〕 高行、申上候は、副島之儀に付、伊藤は如何の考に御座候哉。

〔天皇〕 御沙汰に、伊藤は、副島にては逆も今日の内閣は六ヶ敷と申たり。井上馨は、先以、副島にても宜しかるべし。其訳は各県知事も以下の郡長・村長も今日は、法律とか何とか文明世界の半途にて孰れも半途の人々に候得ば、内務大臣も副島位が先以可然との考なり。

〔佐佐木〕 又、申上候。井上の近日の挙動は如何御座候哉。

〔天皇〕 御沙汰に、井上は、近來は曖昧にて何共不相分。先以、日和見の模様なり。尤、副島を選挙致候と存候。黒田と兩人にて松方へ申入たる歟。勿論不相分候得共、先年、朝鮮へ黒田・井上と参候節、副島の周旋致し候事あり。其縁にては無之歟と存候。前に申通り副島の儀、伊藤とは反対なればなり。又、井上も薩人は、人間の様には不申、薩摩土人と迄に悪敷申居候由也。

〔佐佐木〕 又、申上候。後藤は近日如何に御座候哉。

〔天皇〕 御沙汰に同人は前に申如く、伊藤の辞職には反対の儀申出、至極条理も相立候て、陸奥の如く時々反復の挙動も無之。先以、本氣に相成候て、只今の処は都合宜敷趣なり。

又、御沙汰に、今般、伊藤の辞表云々の頃、松方へ向け、急しヶ条を以て不審相成候由。松方申候、家康より大阪へ不審申入れ候等、所謂、強国より弱国に向け難問申掛られたる景況にて、甚だ困却せりと。其中、北海道の一件は、実は黒田の処分を罰し不申ては、不相成場合にも立到り、逆も實際不被行儀を頼に申入れたる由なり。何分六ヶ敷事の出来候得ば、大臣にても引入辞職致候得共、自分はいつ迄も其難題を処置致し不申ては、不相成と松方等へ申聞けたり、云々。

〔佐佐木〕右、拝承。実に感慨に堪へず。申上候は、伊藤の毎度吾侪を申出候儀は、実以不相濟恐縮の至に奉存候。一般、今日は氣随なる事を申立候者も不少不安奉存候得共、方今の景況致方無御座候。此上は、吾侪者はビシビシと御叩き伏被為遊、叡慮を十二分、御注ぎ被為遊候て、何事も御震〔宸〕断被為遊候様願上度候。真に叡慮の儀、以下迄無徴仕候得ば、全国中には誠忠の者も才力の者も有之候間、十分御補佐可申上、乍去今日迄の勢に候得ば、俄には参り申間敷候得共、御耐忍被為遊候て御運の中には追々御叡慮之儀、一般に貫徹致し可申其時機到来可仕と奉存候間、何分共十二分御奮発被為遊度申上候。其中、最早、午後一時にも相成候得ば、御遠慮致し、御前を退出す。侍従長徳大寺実則に面会して、此度、伊藤へ被下候震〔宸〕翰之儀、相尋候処、

〔徳大寺〕同候、答云。伊藤辞表に付、御止めの思召にて、二月二十六日小田原伊藤方へ立越し、御止めの儀、申聞候処、同人何分御受仕兼候との事にてグスグス申て、屹度勅答無之、孰れ更に辞表差出し候口氣にてありたり。同二十七日、黒田清隆小田原へ立越し、伊藤に忠告致し候由。其趣意は、斯く迄厚き御沙汰被為在候場合、押返し辞表差出し候儀、臣子之分に於て不可然と、伊藤も夫れにて聊か躊躇致し候へ共、確答も無之。翌日二十九日、松方正義、亦、小田原へ立越し、説諭致し候処、伊藤云、此度は決心致し候上、自然世上にも取沙汰と相成、新聞紙にも散見する事と相成。只々、泣寝入も出来ずとグスグズ被申候由。

其中には色々混雜せる歟、薩人も大不平にて最早致方なし。一同、辞表し長州人へ相譲り可申、長州人引受不申時は、改進・自由両党にても誰にても相譲り可申と申迄に相成候由。井上馨・山県有朋等も拝謁被仰付、何角申上候由なり。長人も真坂引受候事も出来ず。何共就かざる景況なりしに、本月十日に相成り、伊藤へ震翰被遣候事の御沙汰有之。則自分御代筆致し、翌十一日相渡事に相成候。右震翰の儀は、井上馨・松方正義兩人の中より申上候と被存候。尤、官報に出候儀も、御沙汰有之候間、其辺も兩人より奉伺と奉存候、云々。

〔佐佐木〕但、官報に出候儀は実に不容易儀と、高行申候候事に本文の答にてありし。又云、官報に出候儀は山県杯も不可然と大に驚きたる由なり、云々。

〔徳大寺〕徳大寺、又云。今般、伊藤之事件は三ヶ条にて、民間にて政党組織する事。其儀出来ずは、条約改正の儀、海外へ派遣にて従事の事。其れも出来ずは、宮内の次官にても何にても宮内官と相成尽力致度との三ヶ条由。宮内の儀は、如何之見込か不相分。然るに、伊藤が松方に面会の時、松方より条約改正之儀を被任度申出たるより、伊藤不平にて、先以、政党組織の事を許さず。最初より条約之儀申出候儀、甚だ不承知と申たる由。一体、伊藤・井上等も芋組の加〔馬〕鹿の御伽も仕尽したる杯申して、迎も松方にては出来ずとの見込なれども、松方は昨年、山県辞表之節、其の跡後は固く辞したれども、是非引受け候へと強て被申候間、不得止引受けたる事にて、憲法を不識とか法律は分らずとか、今日被申たる処、勿論自分の愚は百も承知にて押立て置き、此度、伊藤よりの十ヶ条の不審とか質問とか申来候得共、初めより分りたる事なり。甚だ不信心切也。

自分は今日と相成候ては、陛下より御免無之中は辞表せずとの意気込にて動かず。夫れ故、長人は馬鹿馬鹿しきとの感触と相成たるべし。其上、陸奥よりは松方の事を悪敷、伊藤・井上へ申入れ、亦、品川と陸奥は中〔仲〕悪敷、薩人は概して陸奥を嫌ひたれ共、伊藤・井上は陸奥の才智を称して内閣の一人と信用して十二分に保護致したる故、何分薩長は益々衝突の景況、又、長も伊藤と山県・品川とは頗る不熟、松方と山県は都合能く種々様々の事にて、何分不忍醜態之模様なり。然るに長人は、今日傍観して松方等、薩人の失策、近日にあらん。其の時、乗取候心組ならん歟と邪推す、云々。

〔佐佐木〕高行、右、震翰の草稿は井上毅が答云、然り此の儀、岩倉具定も土方大臣も知る間敷極秘也。

三月二十日（明治二十五年）

〔佐佐木〕宮内大臣官房にて、土方久元に面会。伊藤博文へ被下候震翰の儀、相尋候処、

〔土方〕土方も都て不相心得、前日、松方大臣と井上毅と内談致し候を見受け候。多分井上の草稿と被察候。此の儀は井上馨・山県有朋・黒田清隆、預りたる様に存候。尤、申上候は井上馨にてありたり、乍併、御文意、又は官報に出候儀は、山県は不同意にて有之たる由。山県も最初には関係致したるも、御文意、又は官報へ出し候儀は不相心得との事也。

又、伊藤は徳大寺を以て真の震翰被下候儀願上候由の処、真筆には不及。徳大寺代筆にて宜敷との御沙汰にて、徳大寺御代筆致候由、云々。又云。伊藤は一体不埒なる事なり。右、御震筆で被下候ても、自分等へは一言の御礼も不申出。其上、不平の模様にて今日の時勢いつ迄も束縛せられ、十分運動も出来ぬ様に被致ては困却也。迺も今日の場合は六ヶ敷と土方、云。いつ迄も束縛被為遊方可然と反対に答たり、云々。

又云。伊藤の辞表之起りを察するに伊藤・井上・陸奥身等、共に政權を掌握致候心組の処、松方は一応は譲り渡候様申出候得共、御挨拶に伊藤杯受けず。尚、松方より甲〔かぶと〕を抜〔脱〕きて再之譲渡之儀申出候節、無余儀入閣致し候様の心組之処、松方は右之通一応辞したる後は確乎として不動、不肖ながら、此上は陛下より被免候迄は倒れて後止むとの事にて、伊藤杯之策略違ひ候よりならん。松方は中々感心なり、云々。

又云。伊藤は品川を甚敷悪敷申居事也。伊藤云。品川は山県の笠を蒙りて威張り撰拳の干渉、以ての外なりと。陸奥は夫れを口実に品川に抵抗し、遂に品川怒りて辞表と成りたり、云々。

又云、松方と伊藤の間は近来尤悪敷なりたり。

伊藤よりは、松方は馬鹿なり、何事も分らず。

松方云。伊藤は腰抜け也、真坂の時には役に立たずと。

松方は、先年来は伊藤に何事も依頼せるにて、薩人は松方を伊藤味噌と申たる事なるに今日は如此実に人心は難計、云々。伊藤と山県も愈不熟なり。松方と山県は近来は宜敷方なり。世上にては、薩州・長州の衝突と申たれとも、長州内は如此、実は四分五裂の景況なり。伊藤・井上・陸奥は傍観して、逆も芋組にては近頃失敗すべし。其の時打て出候心組ならん。

〔佐佐木〕高行、云。其節は大隈を誘引の説は無之哉。

〔土方〕土方、云。其の事は聞かず。井上・大隈とは睨合の模様。其訳は、昨年頃歟、三井の家政向改革の節、井上も立ち入り取調たるに大隈は拾五、六万円、黒田は五、六万円借用有之候処、大臣の地位の時は三井も強て催促はせず候へ共、時としては催促致し候申の処、何分其辺には井上の業と疑念致し候て大に不平之由なり。夫れ故、大臣は猥に相望候由。井上も大蔵大臣なれば拝受すべしと先頃も申したる処、松方も大蔵は他人に渡さずと申事にて、井上の志願水泡と相成に候由、云々。

〔佐佐木〕高行、云。過日、御沙汰に、副島の内務大臣は不可然考し、辞職致し候時は、又、一人の谷出来候て、内閣も困り可哉、云々。谷の儀は如何の模様也。

〔土方〕土方、云。夫れは先般、副島へ谷より伝願し麝香問詰被仰付度。同問詰なれば、時として拝謁出来候との事にて、副島より徳大寺へ申入たるに付、徳大寺より申上候処、御許容無之、谷には只今の俣にて宜敷。一体、谷も時々思想ハ相変り候間、先以て許さずとの御沙汰有之候由。如何の事歟、云々。

〔佐佐木〕高行、云。此度、副島任官の儀は過日色々御内沙汰拝承せり、如何のご都合歟。

〔土方〕土方、云。内務大臣は徳成人にて重量有之人に無之では、県知事等の折合も不宜。副島は地方官・地方人



には人望有之趣に付、其辺より松方、推挙致し候様に被察候、云々。

〔佐佐木〕但、徳大寺の内話と委敷もあり粗なるもあり。伊藤博文辞表云々の儀に付、本月十九日、御直に御沙汰拝承致し候て、徳大寺実則の内話、土方久元の談話等考合候処、御沙汰の中にも拝承違の儀も可有之哉。又、徳大寺心得候て、土方之知らざる關係あり。土方之心得候て、徳大寺の知らざるあり。聖上の御沙汰も、徳大寺、又は土方及高行へ御沙汰の中にも、自然精粗被為在候と奉恐縮候。依ては、其辺篤と考て見るべし。

伊藤は何事も程能く忠臣顔に申成し。又、文書に残し可申、真に国家を憂ひ帝室の御為と申成可申候へ共、是れ迄の心術信用難成。畢竟、此度も色々と難問申立候と、吾か志の伸ざるを口実にして難被行事も申立候と被存候。今日、伊藤は政事上の事は御信用もあり、随分、内閣にても意見被行、又、井上毅・伊東巳代治等手足も有之候事にて愈真面目に憤発致候。誠実に相究し候精神なれば、色々の苦情難問を持出さず進んで政権を取り、議會に対し、又、条約改正の儀も十分担当すべきに其表面に当りて倒れて止むの精神は無之。何事も不精神にて一時は立派に切出候様見えても、半途に撓〔たわ〕み口実を以てクズクズ申立、独り天下の人物と見せ候事等、実に可惡事なり。世人も知りたるもあるべし、亦、知らぬもあるべし。乍併、今日の社会は、孰れも只々利己に相成候故。人を信するも信せざるも朝夕に變り、其故伊藤杯を押立候時は利益と見る人は一等の政事家と称せり。決して柱石の臣に非ず、亦、大政事家にも非ず。乍併、今日天下に人物乏敷、藩閥にて久敷要路を占めたる故、能々本氣に相成候は、役に立可申と存たれども、此頃愈頼なき人物と被存たり。寧、松方の方、鈍くも誠実なる方は取るべし。後の世の参考に愚見を記すなり。

明治二十八年五月十一日 京都にて



〔佐佐木〕参内之節、桜井能監に面会に付、高行曰く、此度之聖上之御風気は如何被為在候哉。聊かの御模様奉伺候処、却て御違例とも難申上様拝承す。

〔桜井〕桜井、微笑小声にて、実は何も御障り不被為在候処、如何なる事歟、内閣より御着京の上、暫時治御風気と奉唱候様申上候由。是れは拝謁人等多く有之。何角、申上候儀を憚り候歟、不相知夫れに付、聖上には御許容被為遊候へ共、却て宮中は御運動非常に被為在、女孺等の洗濯物乾し置候場所迄、出御に相成一同恐入致候。何か思召被為在ノ様奉伺候、云々。

〔佐佐木〕同日、徳大寺侍從長二面会奉伺候処、

〔徳大寺〕玉体に被為障候御事ハ無之候も、併、時々と思召に不相叶御事あり。不相変御承知通り心配せり、云々。  
〔佐佐木〕因云。徳大寺の云へる事は、他人は知らざる事多し。

五月十二日（明治二十八年）

〔佐佐木〕参内、午前十一時半より被召出拝謁被仰付候。久々にて御内輪の拝謁に付、何角奉伺度、先以両宮殿下、先般御違例之处、此節は御全快之御模様等申上候処、

〔天皇〕夫より御直に色々御沙汰拝承す。抑、昨年開戦の初に当り心配致候ハ、兎角軍人は戦争ニ勇み候事ニ候へ共、内閣と意見違候様の事有之ては不相成。陸海軍枢要之場所と内閣は能々協議可致、第一会計の事、大事なれば其辺、尤、注意すべし。無理無闇ニ大勢を押出候時は会計ニ、万一十分見込不相立場合にも可相成と考候間、能々予め折合候様、有栖川〔宮熾仁〕参謀宅へ篤と為申合候、云々。吾兵の忠勇義烈なる事は、各国にも比類稀なるとの事あり。其替り随分駕馭致し難し。戦争中は議員も異議なく、公債募集も決議せるも、然れども平和ニ復りたる

上は、議員は必ず政府ニ反対し、中々八ヶ間敷こと前日の如くなると、云々。

〔佐佐木〕 高行、謹而申上候。御沙汰の如く、陸海の忠勇、義烈なるは御国特殊の儀と奉存候。是れ全く万世連綿たる皇室ニ被為在候故と難有奉存候。随而、駕馭し難き処も、大に可有之由。是れは大臣初め中間にて能き程に万事相運候様心宜居る者も多く、又、政府ニ反対して各党派の間、我党勢を張るの事情も可有之候由。此上は、何分其叡慮の能々貫徹致し、実に御公平なる処、孰れも拝承仕候へば大に悟る処も可有之。此上は万事御親裁被為在候御儀御肝要と奉存候。

〔天皇〕 御沙汰に、盛京省半島を吾が領と致し候事ニ付、最初より如何と考へたり。同地の模様を開くに収納は至て少く、迺も行政上軍防の事には行き足り不申。本国より仕送ならでは何事も出来ざる様子也。或云。台湾は頗る利益あれば其利益を以て、半島之費用に宛候様申者も有之候へ共、直に利益揚候事は覺束なく、仮令利益あるも其台湾に宛候費用も夥多なるべしと考へたり、云々。

〔佐佐木〕 高行謹而申上候。御沙汰之通、一々御尤も奉存候。半島は数十年之後は知らず何分差向御厄介者歟と奉存候。台湾も御沙汰之通にて国防の事、行政上種々改良等ニは御費用容易ならざる様ニ奉存候。尤、半島は御返却相成候へ共、台湾は是より十分の御手附を不申ては相成間敷深く其向の者、注意專一と奉存候。

右之外、色々御沙汰相承候へ共、何分御間断なく、御沙汰被為存候間、拝承違の事も可有之、又、拝承致し兼候御儀も有之候へ共、押返し奉伺候事も仕兼候場合有之旁、御詳細の御沙汰を記し候事不相調、只、大概を記す而已。

因云。陸奥宗光の内話ニ、盛京省半島を割与為致候儀ハ、叡慮には最初より如何と被思召候御模様なれ共、其時の勢、是非割奉為致候様の談判に及ばざるべからざる場合有之たり云々、と云へり。爰以最初より御議論被為在候

御事と今日の御沙汰にて奉恐縮候、穴賢々々。右退出の際に更に

〔天皇〕御沙汰に、過日も伊藤に笑談は半分に申聞候ハ、半島を取る事は急速にも及ぶまじ。此度の戦争にて地理人情も相分り居候へば、不遠朝鮮よりか、又は何方歟より再戦の期来るべし。其時、愈取り候て可宜と申したりとて、大に御笑被為遊候也。

〔佐佐木〕因て、奉恐縮候に他日必事あるも其覚悟肝要との思召ならんと拝承す。穴賢々々。

五月十三日（明治二十八年）

〔佐佐木〕昨十二日、拝謁の節、還幸を両宮殿下御待兼被為在候処、来月頃之思召に候哉奉伺候処、

〔天皇〕御沙汰に、大総督宮帰朝之上、各兵隊等も引揚之次第も有之。急速の運に至り申間敷。何分当分は還幸ハ六ヶ敷候との旨被仰聞候間、

〔佐佐木〕然らば帰京の上、其段可申上候申上候。

〔米田〕夫より侍従米田虎雄之談を聞くに、還幸の儀は内閣よりハ差急ぎ候様申上候へ共、兵隊引揚げ等凡そ纏り不申ては不相成と中々急速還幸の御模様ニ不被為在との由なり。

〔佐佐木〕然るに同夜、樺山資紀送別宴会之席にて二、三の大臣より拝承するに、来二十三日と御内決相成候との事なり。今朝迄急速の御模様ニ被為在候ニ如何之御都合哉と存候二付、

〔土方〕土方久元ニ面会之節、相尋候処、成程、昨日夕刻ニ御内決相成候へ共、孰れ大総督宮御帰朝之上の筈之処、大総督宮ニは来於八日、大連湾御投錨之趣ニ付、一日も早く御発船之旨、電報参り候処、まだ返電無之ニ付、何分確たる事は不相分遅くも六月中ニは還幸可被為在との答なり。

五月十五日（明治二十八年）

〔佐佐木〕参内。明日より出足二付、御機嫌伺二御内儀等へも罷出。表にては侍従・御内儀二ては女官へ還幸も近々の由、拝承之旨申したるに、両所とも成程其説は承り候へ共、まだ何とも御沙汰不被為在とて、大に疑惑之模様なり。是れ全く遠征軍隊之帰朝迄は、御駐輦の深き思召二被為在候二付、まだ御決定不被為遊御儀かと難有奉恐縮候事。

九月三日（明治二十八年）

〔佐佐木〕参内。午前十一時三十分より被召出、拝謁す。過日来、皇太子殿下御違例にて、去月十六、十七日両日頃ハ不容易御容体二被為在候時分、委細奉聞相成候節、殊之外御叡慮に被為懸、既に皇室典範を御覽被為遊迄二被為在候趣、

〔桜井〕桜井能監より密に拝承したれば、実に恐縮二不堪如何之御気色二被為在候哉と罷在候處、殊の外御麗敷、平日に御替不被為在。

〔佐佐木〕依而、難有不取敢、皇太子殿下御輕快之恐悅申上。夫より両内親王御機嫌克被為涉候御模様等、夫々言上仕候愈以、御気色御麗敷被為在候、其時

〔天皇〕御沙汰に、台湾も意外に六ヶ敷事にてありしが、追々勝利にて好都合なり。同人民は頑強の趣、向來の統治上随分骨折なるべし。能く駕馭すれば望あるべし。若し下手に駕馭すれば後患あるべし。尤、遼東半島と違ひ、産物は余程富み候由。樟脳は世界中第一等と云ふ。昨年、極上等の樟脳なくて書物等式へ入れ候の分、下品と相成、不審に存居候處、此頃に至りて、是れ迄九州等の分と申唱へたるも、極上等は皆、台湾の分の由、相分候。戦

争に付輸入絶えたる由なり。吾か国等の分は逆も同島には及ばず。楠の大木、森々と致し居候由。

又、茶も同島の分は葉広くして、紅茶に製して格別香味有之とて、各国にても賞味せられ候由。砂糖は勿論沢山出産致し、彼是して同島の産物ハ余程利益ありて、支那政府の歳入多く向後は同政府の歳入に影響を来たし可申。就ては、同政府何処にて同島の替りに財源を求めざるを得せるとの事也。

又、同島の風景も宜敷□□□□ハ西京の如く四方山にて、甚た面白き場所と云へり如何哉。此上生蕃等の模様は、不相分中々世話やけ可申歟。尤、内地の事情を誰れも不相心得、支那政府より、まだ探索致さざる趣に付、土地善悪も何も不相分。然れども兎も角、同島平定も能々行政届候ハバ、十分望有之との事也。彼の遼東半島の如きには無之由なり、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。台湾は、御沙汰の如く平定の上、能々政治御施行相成候ハバ、必好き地と可相成候。遼東は何分産物ハ無之趣ニ承り候。然るに露国等より、吾が兵を早く撤去致呉候様申立候趣、新聞紙上ニ相見え申候、実事ニ候哉。

〔天皇〕御沙汰ニ、其説ハ有之事なり。何分、支那地を借受鉄道線路に致し候合に付、吾兵屯営にては不都合との事歟、種々説あれども不相分、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。遼東半島の兵を悉皆今日引揚候も如何哉、と愚考仕候。

〔天皇〕御沙汰に、威海衛は賞金の担保にて条約あれども半島は三国の忠告にて、還附せる故に引渡の手順相立候ハバ、引揚候事ならん。然るに露国には引揚を申立る歟と見れば、亦、唯引揚は如何哉、何か償金を取りて後、との口氣も有之候由。縮る所、彼等の外交談は其趣意、何の辺に有之候哉。在留公使の言ふ処と本国政府の説とは相違し取留めたる事なし。勿論露国に限らず外交の事は皆嘘而已にて、吾国人の考にては実に合点行かざる程なり。

然れども、其嘘の中に大に味ふべき事ありて、中々六ヶ敷景況なり。

又、御沙汰に、蒙古は是れ迄支那政府より、余程強制《此処篤と拝承し兼ねるたり》致候処、近來、緩に処し、蒙古の方も勢を得たりと云ふ。然るに蒙古地方等は一般に露国の宗教ハ堅く忌み嫌ひたるに如何の事歟。昨年、征清軍の起りたる前歟、又、其の頃歟、露国宗教の幾百年祭とかを挙行あり。其節より、蒙古地方等露国宗教の信徒は多く相成たる由。何か露より味身を与へたる歟、露国は其辺を機会として歟、鉄道布設すれば両国の平和を保ち、亦、相互に大に利益を得ると説得せりとの風聞あり。何に致せ大に注意すべきなり、云々。

〔佐佐木〕尚又、御沙汰に、被為在候御模様なれ共、零時三十分過ぎ候間、御前を退かんとする時、如何の機か風と又、皇太子殿下、過日不容易御容体の際は大医の「ベルツ」も伺兼たる趣に拝承申上候処、

〔天皇〕御沙汰に、何分、医師も見通しは六ヶ敷と見え宛にならず、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、御沙汰の趣恐縮仕候。乍併、独医士不而巳一般の事、宛に相成不申。昨年の戦争にて最初より確説はなかりしかと奉存候。世の中は誠が嘘となり、嘘が誠となる例不少。万事十分、叡慮を被為注御事御肝要と申上候へば、

〔天皇〕御笑にて其の通りと御沙汰被為在候。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、松方正義も色々風聞御座候所、遂に御免被仰付候。夫是乍恐、御叡慮被為掛と申上候へば、

〔天皇〕御沙汰に、松方も種々と相成居候処、縮る所、退職せり、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、右等に付、伊藤博文ハ格別動き立候儀ハ無御座歟と奉存候。

〔天皇〕御沙汰に、先以何もなし。伊藤は此頃、殊の外多忙なり。同人は多忙なれば何角、申立候事はなし。兎角、

隙になると何か申出るかも知れずと、大に御笑被為遊候。

〔佐佐木〕右、御沙汰拝承の中、拝承を誤りたる事も有之。又は、伺定め兼候御事もあり。僅々の時間にて色々々々、御沙汰拝承候へ共、拝承違も多く、又、拝承致兼候御沙汰もあり候へ共、凡の処、書記し、尚又、御都合の節、伺定め、又、品〔ママ〕により候へば、徳大寺侍従長辺にて、伺可申上と存候間、先以、謹て荒方の処、書留候也。今上帝の御英名、御聖徳の御事ハ、近來一般の人々ニも難有相心得居候へ共、如此万事御精密に被為注、叡慮候御事御厳格にて、御内議等にて、御行儀等の正敷被為在候御事ハ、深く心得候者は、宮内省中にて大臣・侍従長等、昵近し奉り候人の外、詳細には不相心得かと被存候。我が先君にて、〔山内〕容堂公は非凡にて威嚴不可犯。亦、事理分別する事、他の諸侯には、稀に見る所なりしも、乍恐、陛下の御謹嚴にて、時理精密に被為在候事は及ふべくも非ず。只、徳義高き補佐の任に乏敷ハ千歳の遺憾なり。穴賢々々。

十月二日（明治二十八年）

〔佐佐木〕参内。徳大寺侍従長に面会。昨日は常宮・周宮、御安着被為遣候二付、御機嫌伺の旨、且、御都合次第、拝謁を候て御直に奉聞の儀、申上呉候様申入る。早速申上呉れ、其間侍従職にて相控居申、岩倉具定・桜井能監等、何角談話す。午前十一時三十分頃、被召出。

高行、謹て陛下、天機御麗敷被為在候を奉祝、続て両内親王殿下御滞晃中、何の御障も不被為在、益御機嫌宜敷、昨日御安着之旨申上。皇太子殿下逐日御輕快之段恐悦をも申上候処、御満足の御気色に奉伺候。扱、日光の本年の氣候の模様申上。本年は土用前より在京同様日光も雨天にて土用中、又、土用後も同断の事にて、余程、作物にも障り可申、且、人身ニも如何と申位にて、登山の人も稀に有之候趣、然るに秋氣に至り、暑氣強く作物も意外

に見通し候由。又、自然氣候も宜敷候哉。高行杯は、毎年「リュウマチ」病にて困却仕候処、平年と違ひ、大に快く相暮し申候。尤、是は自然病症の挫け候哉、難計候へ共、先以、衆人にて平年と天候の相違有之様に被存候事は雷鳴に候。日光は、随分雷鳴は致候処、本年にて六ヶ年御供仕候処、昨年は非常の雷鳴にて、昨年登山致候者八同山程雷鳴の甚敷ハ有之間敷と感じ可申。然るに本年は殆んど雷鳴は無之程にて、一日少々有之申候。本年初めて登山の者は誠に雷鳴の無之処と存じ可申。仮令ば、昨年と今年と登山致候者の相違は如此事二候。定めて氣候善しとか悪しとか申候ても一概には定め兼ね候。兎角、経験を重ね不申ては不相分候。

〔天皇〕御沙汰に、雷鳴の昨今兩年にて、相違は如何の者歟、成程実地を能々極め不申ては不相分と御笑為在たり。〔佐佐木〕高行、申上候は、謂天候・土地に限り不申。人事百般の事如此ならん歟。陛下には、維新以来内外の事件にて種々様々に御経験被為遊候へば、乍恐、申上候迄も無御座。既に昨年の戦争の如きも、如此大戦争に至り清国の斯く迄大敗に及候事は各人も意想外とか申事にて、佐佐木杯も、今日より考候時は昨年当初の考とは大に相違仕候、云々。

〔天皇〕御沙汰に、経験は大事の者なり。昨年の吾が大勝利にて支那国の内幕見透附きたるより、欧州各国も余程東洋の方針を替へたる由。是れ迄ハ支那は兵力も不十分とは存じながら、大国にて四億万の人々があり、産物も多く候へば、容易には内幕は窺得ざるに前件の次第と相成りたれば、露国は殊更に力を用ゐるの景況なり。此頃聞く処に拠れば、朝鮮の北方の山間則支那地を鉄道線に致すの含みにて、支那政府への申入れ、既に同政府にて、許容せりとの説あり。是れ迄は、支那も決して許容すべき地に非るも今日は最早、夫れを拒み候。国力無之との事なり。

又、陝西、甘肅省の変乱も或は露国か煽動には無之哉との説もあり、如何哉。過日も申述候通り、蒙古との境界



も支那ハ防衛もせず。支那政府と蒙古人と平穩の形なれども畢竟するに、是れも露国よりの周旋にて何方も平和の策と申唱へ、鉄道を敷設の爲めなりと如此平和を唱ふるに不拘、此頃ハ露国罪人を蒙古等支那地境へ多数を移し、其罪人暴行あれば支那より制し候場合、自然の勢にて、露国罪人を殺害も偶にあれば、其れを口実にて難題を申掛け縮る所、支那政府は夫れを厭ひ露国へ割譲為さしむるの策なりとも云ふ。支那は、其西方は仏国の積年望める処を許容せるとぞ。夫れに付、英国は支那に対し苦情申立、此頃は如何なるか、兎も角も昨年の大敗に支那の内幕見透され各国より色々の難題申掛けられ、国難甚敷被察候。然るに支那は昨年出兵致候者ハ漸々世界の大勢も分り、大に改革せずは成らすとの感あれども、総理衙門には無頓着の由なり。

此上、支那政府に夢を醒し呉候ハバ、吾れも大に都合能く考候へ共、中々六ヶ敷模様なり。支那政府如斯にては遂に吾れと欧州の関所なしと相成可申、露国は尤急進の鋒向にて、日本もまだ十分防御出来ず。支那ハ、今日ハ実に無力なれば、早く東洋に頭を出す策なるべし。今日の機会を失ふ時は、日本より支那を支配するに至るべしとの見込の模様の由にて、露国遠略大望あれば隠然として、今日は可成他国人の目に立たず、感触を悪敷せぬ様に表面を粧ひ、裏面ハ急進の策に過日も申候通鉄道等非常に力を入れ運ばせ候との事なり、云々。

〔佐佐木〕 高行、申上候。御沙汰の如く露国は数百年來の方針を変せず、一時の事に無之。同国人の氣象は中々遠大と兼々承知仕候、云々。

〔天皇〕 御沙汰に、露国人と吾か日本人とは氣質大に相違して、我人民は神經質にて何事も騒々敷、目先きの事は鋭く候へ共、遠大の略に乏敷。如此正反対の氣質なれば、僅々の事より激昂して、其末衝突と成り、大害を引起し候事無之とも難申、大に注意すべき事なり、云々。

〔佐佐木〕 高行、申上候。御沙汰の通りにて、向來余程御困難の場合と奉存候。何とか表面上騒ぎ立ち不申根強く

軍備御拡張相成。聊かも、彼露国等の口実を避け候に致し、万一の時は、仮令、我に倍する力ありとも、世界の公論に日本の正義に称賛為致候様の事、肝要と奉存候。就ては、御内政は勿論、外交の任、尤、御大寺と奉存候。今日の外交ハ中々容易の事に無之歟、云々。

〔天皇〕御沙汰に、外交の事は実に不分、外国皆嘘言而已。昨年戦争中、仏国公使杯は、在京にて色々口実を以て苦情を申立候処、仏国の海軍則、黄海等に始終往来せる其総督ハ、我が海軍に向け頗る好意を表し、支那海岸の測量図を詳細に示し、或は石炭欠乏の時は周旋すべし。

又、電信の通知も或場合に取計可申杯、内々申談じあり。夫れ故、戦地より仏国は、実に我れに深切、聊か敵意なしと申来候処、東京外務省よりは、前件の如く公使の苦情申来候事にて、都て不相分。独り仏国に限らず、外交政略は皆如此其信否は窺ひ兼候。其場合に処し、能々彼か深味を探り得る事、外交家の働なれば面白味もある処なるべきも、中々六ヶ敷事なり、云々。

〔佐佐木〕高行、奉伺ひ、遼東半島還附の件は、如何の御運に相成居候哉。

〔天皇〕御沙汰ニ、是も判然せず。露仏独三国よりハ、還附の報酬として支那政府より償金を取り候事、当然ならんとの事に付、此方よりは支那支那〔ママ〕ニ談判致候ても、同政府は金員相調申間敷、迎も出来ざるを、強而談じ候事は不相好と申答へたれば、露国の答には、夫れは必ず出来可申上との事なりと、此方より夫れは出来候ても、僅々の金なれば取らざる方宜敷と申候処、彼れ云、凡二千万円とか両とかハ取れ可申との事ニ付、此方よりは貳千万円位ハ無用と答へたるに、追而、三国相談致せるに独乙は不用意と申事にて、一時ハ纏らざる模様の処、夫れも纏り候か。日本の望は如何程ならんとの事なり。依而、此方よりハ寡くも四、五千万両ならでは無益と申したるに、又々、四千万両とかなれば、調ひ可事との事ニ付、愈請合候歟。

又、支那政府も承知かと詰めたるに支那政府も承知と申候へ共、何分判然せず。尚又、愈々の処を押詰めたれば、又々、三国相談致候と申事に相成居候由。右の次第なるに、過日、林董公使より電報に此度談判は欧州人に喩を入れだせざる様に致度と李鴻章の談じあり。如何哉と申来候由。然らば支那政府も還附の件二付、償金を出す事は承知と露公使の申候事も宛に不相成候。此末如何相運候哉。

露国は右償金の事には大に力を入れ候由。是れは、支那政府に対しては、此度償金の事に付、露国の尽力なく支那政府独力にては相調不申候処、十分に尽力せる故に、都合よく相運不都合に至らずと申処を以て、支那政府より露国を徳と為致候上、尚又、日本に対しても只々還附のみにては、感触悪敷償金の周旋致し候はば都合宜敷。他日、朝鮮等へ頭を出候節も、自然、日本人の異議を生ぜざる為めの策ならん歟。孰れに致せ露国ハ遠略大謀を抱き、漸々と不撓不屈の年月を積み、大志を果す針路に向ひ来る事なれば、大に戒心可致事也。

日本人は神経鋭く騒ぎ立、支那人は鈍く其中に露国に侵略せられ候事なり。日本人と支那人と打ち交せたる人間を作り出し候ハバ、露国等に対しては好都合ならん歟。天質の人間なれば、致方なしと御笑ひ為遊候。

〔佐佐木〕高行、申上候ハ、御沙汰の通奉感佩候。此上、叡慮の処を能々内閣にて遵奉し、内閣確乎として動揺致さず自然御趣意一般に貫徹すれば、大に望ある臣民と奉存候。誠に御大事之御場合と幾重にも奉存候。右、申上候中、零時三十分廻候間、御昼食の御時刻打過候と存候二付、恐多く退出せんとの場合、尚又、奉伺、陸奥大臣辞表の趣二候如何の御都合歟。

〔天皇〕御沙汰に、同人も病氣にて、迎も六ヶ敷由。彼の病痕は本人ハ深く感ぜぬ事なれ共、何分大患の由なり、云々。

〔佐佐木〕高行、笑ひながら、陸奥引入候ハバ、伊藤は困り可申と。

〔天皇〕御沙汰に、伊藤ハ困るであらうと御笑ひ被為遊候。

〔佐佐木〕尚、奉伺度、申上処有之候へ共、右時刻過ル間退出す。本日の御沙汰も拝承違も多からんなれ共、凡の処ハ相違も無之候間、後日の為、密に記し置候也。

十月三十一日（明治二十八年）

〔佐佐木〕侍従職へ罷出其節、朝鮮事件の事に及ぶ。

〔徳大寺〕徳大寺云、三浦公使の心情の儀に就ては、

聖上の御沙汰に、三浦も此度は利欲の為に致したる事なく、向來、朝鮮の爲め、吾国の爲めとの存慮よりの事ならん。然らば朝鮮は、或は向來の爲めに成る歟も知れず。然れども法律より見れば、三浦も罰を受けざるべからず。誠に氣の毒なる事なりと、難有御沙汰拝承せり、云々。〔三浦力〕右之段、拝承して御仁慈の思召難有感泣せり。

〔桜井〕因云。昨日、桜井能監参殿の節、内話に、三浦の事件は都て不相分。八日変事後、三浦と朝鮮政府の往復書を見るに關係の跡も見えず。三浦より忠告の文通もあり、彼れよりの答書もありて、何分訳が分からず、云々。

〔佐佐木〕此度の事は変事中の変事歟。孰れ洗濯の上ならでは、分明ならず。後日を待つの外なし。

〔徳大寺〕徳大寺、又云。三浦ハ、八日変事後の事は申出候へ共、其前の事は都而口を開かざる由。兼而の計画は口外せざるの嫌ありと、云々。

徳大寺、又云。此度ハ、吾国も格別異議を唱へざる模様、云々。

〔佐佐木〕因云。過日、伊藤の談中に露国ハ或は此度ハ運動せざる歟とも考へると云へるに符合す。所謂、大先生

にて他日、大に運動の策歟。知りたし。

四月十日（明治三十年）

〔佐佐木〕 久々にて拝謁被仰付候の節、左ニ。高行より、昨年夏、箱根新宅に御滞在中の御事より、又、当年、三島御旅館中の御事。又、御学の御模様等詳細申上候て、御参内の儀、御内儀女官迄申上候処、両宮御参内御待兼ね被為在候間、米田御供仕候て、可然哉と申上候処、追て沙汰すべしとの御事ニ被為在たり。右、畢て左之通何角御沙汰拝承す。

高行、申上候ハ、近日の各県知事等、新人物御登用相成。追々、各省へも同様御登用との風聞承り申候。一体内閣の景況は如何ニ可有御座歟と奉伺。

〔天皇〕 御沙汰に、松方も二十四、五年頃とは、余程一体の模様替り。大隈と今日は相互に事を取る事なれども、松方は兎角不決断にて、何年もグスグス致し候との景況なり。一体、松方は決断ニハ余り乏敷方也。（但、能く伺定めず、松方二十四、五年頃は、大隈とは反対なりしが、今日は相提携するとの、御沙汰の様にも奉伺候へ共、何分確とは不得奉伺、其俣を記す）

御沙汰ニ、樺山も今少しは出来ると考たるに、黄海の戦争とは丸で違ひ、意外ニ弱く相成りたり。

〔佐佐木〕 高行、申上候。樺山は武人にて、行政事務等は短所なるべければ、確との目的も無之処より自然弱みと相成可申。行政事務は大隈の方には相叶ひ申間敷歟。

〔天皇〕 御沙汰に、大隈は随分出来るなれども、何分宛二ならぬなり。大隈も子分どもより色々被申立候事柄を内閣へ持出しても、何分被行事も不十分にて、此頃は板挟みと相成困却との事也。

御沙汰ニ、内務次官も余り力無く、議論にて失敗との事也。又、警保局長も法律は不十分との事にて、議論にて是亦失敗せるなり。既に、岩倉具定より法律上の儀、質問せるに即答出来ず。追て返事可致との事にて幾日も費したる由。岩倉の質問にさへ如此次第なれば、議場にて六ヶ敷筈なり。《但、岩倉云々、何歟宮内省関係の事歟、委細は申得奉伺》右次官も局長も、樺山の推挙なるも何分不十分の人物ならん歟。然らば、樺山も人を見る事は短所か。

〔佐佐木〕但、内務次官中村元雄、警保局長ハ寺原長輝なり。

〔天皇〕御沙汰に、伊藤博文は何年も一人にて決断せる模様なりしに松方は不決断にて因循の形なり。乍併、孰れか宜敷哉。伊藤は、板垣を登用したる処、追て、自由党を局長とか知事とかに採用せるより、今日、松方にても進歩党等を追々採用せり。過日、松方へ申聞けたるは、自由党にても進歩党にても何党にても吾臣民なれば不可は無之候へ共、党派の軋轢より県知事等、改替有之様ニ相成候ては、地方の事務拏らず。相互に事業を妨害し、其弊や山林伐り、或ハ仕掛けたる事業を廢し、又、新事業を起し候様にては、甚だ一般の弊実と相成候間、十分注意せよと今日の処にて、兎角、党派の弊を来す傾きありと。

松方、云。憲法政治は六ヶ敷と云へり。尤、黒田清隆・西徳二郎杯も憲法政ハ六ヶ敷、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。憲法政は高行杯、勿論不相好候。乍併、今日御廢止も六ヶ敷あらん。高行ハ常に愚考仕候ニ、欽定憲法にて欧米各国とは特殊の御国体なれば、其の根元を心得、欧州流の議院政治に無之様、内閣十分力を入れ候ハバ、其の弊も少からん、然るに、伊藤も自由党等、提携致候辺りは議院政治の端緒を聞きたる様子相見え申候。抑、欽定憲法、御施行被為在、帝室内閣との御趣意の処、憲法起草者の伊藤が既に議院政治の傾を示し、松方、其後を受け愈党派政治の景況ニ相成候場合、松方も如何の考にて憲法政を六ヶ敷申候哉。

高行の愚存ニは、欽定憲法の御趣意に基き、特殊の御国体の処を以て貫徹致候様仕度。其上ニて議員に遵奉せず、益々、八釜敷相成候時、自然、天下の人心も憲法政の御国体に背くとの感念可相生。

勿論人民一般と申ニは無之候へ共、智識ある者、学者間ニ右の如き感念を生じ候場合、其の様を見て断然御廃止も可然。今日、まだ欽定憲法御国体に基く処を十分の貫徹の道を尽さずては、追々六ヶ敷変生し候も難計、云々。

〔天皇〕御沙汰に、憲法政は六ヶ敷との事にて、今日、廃止と申事ニは無之候、亦、向來も廃止と申す考か不相分。只々、色々心配致候より憲法政は六ヶ敷と相考候。

〔佐佐木〕高行、申上候。万国無此なる善美の御国体を聊かにても疵付け、欧米各国の君民同治とか、議院政治とか、申す如き弊に陥り不申様、叡慮を十二分に被為注、万古不易の御国体を強固に被為遊候儀、千祈万願ニ奉存候。乍恐、陛下は如何様の御場合にても御天職を御尽し、被為遊候御儀にて、内閣大臣は聊か意見か違ふとか病氣とかにて辞職仕候儀なれば、陛下には向來万世の弊無之処、御奮発不被為遊ハ不相成儀と乍恐奉存候。右、申上候処、御感触被為在候様奉伺候。格別、御沙汰は、不被為在候。良々暫ありて。

〔天皇〕御沙汰ニ、今日の各大臣等も各長短はあれども、寸尺均しく長高く抜き出たる者無之に付、何事も纏り兼ねるなり、云々。

〔佐佐木〕高行、申上候。御沙汰の通りニ奉存候。西郷隆盛・大久保利通の如き人物には、高行杯は最初より力及ばずと存じ申候得共、今日の処にては、伊藤にても松方ニても、大隈・山県・黒田等ニ対し直に負可申とも角力を試み、捻合ハ出来るとの気力は出で申候。然らば、西郷・大久保は余程寸尺高く抜き出候心地仕候。

〔天皇〕御沙汰に、其通りなりと大に御笑ひ被為遊候。又、御沙汰に、局外の時と入閣の後とと意見孰れも相違すと見えたり。其一を以てすれば、板垣が局外に居る時は役人の月給減少論を唱へたるも、入閣すれば増給論を申出

し。又、大隈も同様の考にて、僅々の年月にて、惣ち如此万事准之可申と被考候。

又、御沙汰に、独乙帝の被申候ニ日本にて立憲政治ハ不宜、欧州ハ色々の事情より成立ちたる事なれば、今日、日本にて立憲政を行候事ハ無用ならん、云々。

〔佐佐木〕 高行、奉伺候は、独乙帝ハ先帝ニ被為在候哉。

〔天皇〕 御沙汰に、今帝なり。《併し誰が拝承致したるが不得奉伺。御沙汰ありたれども拝承致しかねたり》

〔佐佐木〕 高行、申上候。欧州各国にても議院政は随分困却と承り申候。夫れニ独乙帝杯も被仰候歟。私共ハ不相好政体ニ存候へ共、前件申上候通り御国ハ特殊の御国体ニより、憲法御発令ニ相成候事なれば、其元を忘れざる様の事、今日、尤、肝要ならん。乍併、其辺は中々六ヶ敷事ならん。高行、奉伺ハ、伊藤博文は近来拝謁被仰付候哉。

〔天皇〕 御沙汰に、都て対面せず。伊藤が参向致し拝謁被仰付候杯をと申時は色々の風説相立。返而不可然と相考候事ニ付、召寄候事も無之、云々。

〔佐佐木〕 右、御沙汰は、何分前後致し、又、十分拝承致兼候儀も候へ共、強而押返し奉伺候儀も奉憚たる事にて不貫徹の節不少、只々、拝承にて記憶せる俟を謹みて記し他日の参考とす。

## 註

(1) 姓の表記は、霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』（霞会館、一九九六年）記載の「佐佐木」が正式と考える。但し、宮内公文書館での表記が「佐々木」であるので、本稿では、史料名のみ「佐々木」表記を記し、それ以外は「佐佐木」と表記する。



- (2) 佐佐木の関係文書に関しては、西川誠「佐佐木高行」伊藤隆他編『近現代日本人物史料情報辞典』一（吉川弘文館、二〇〇四年）、勝田政治「佐佐木高行「保古飛呂比」」加藤周一他編『日本近代思想体系』別巻（岩波書店、一九九二年）、拙稿「佐佐木高行日記群の全貌」『日本歴史』七九九（吉川弘文館、二〇一四年十二月）を参照。
- (3) 常宮までの天皇の子女は、佐佐木が多少関与した大正天皇を除いて、八人全員夭折している。佐佐木が携わった両内親王は長生しているので、宮中の佐佐木への信頼感は強かったであろう。
- (4) 佐々木隆「明治二五年の伊藤新党問題」『日本歴史』四六八（吉川弘文館、一九八七年五月）、同「第一次松方内閣の崩壊（その1）」『聖心女子大学論叢』七一（聖心女子大学、一九八八年七月）。
- (5) 例えば戸川猪佐武「明治・大正の宰相二山県有朋と富国強兵のリーダー」（講談社、一九八三年）二七三頁。
- (6) 佐々木隆「伊藤博文の情報戦略」（中央公論新社、一九九九年）一八九頁。
- (7) 天皇経由の情報のため、虚偽・風説ではないと思われる。
- (8) 佐佐木に長年近侍したというだけで詳細不明。佐佐木の史料をいくつか刊行し、写本を作成している。

別表 「佐々木高行日記抜書」に関する情報

日数	原史料		照合史料・箇所		内閣	年齢			
	年月日	頁数*	番号	照合頁・コマ		佐佐木	天皇	常宮	周宮
①	24.03.09	10	A	723-26, 736-37	山県 I	62	40	4	2
②	24.04.07	6			山県 I	62	40	4	2
③	24.09.26	8			松方 I	62	40	4	2
④	24.11.04	9			松方 I	62	40	4	2
⑤	25.03.19	22			松方 I	63	41	5	3
⑥	25.03.20	11			松方 I	63	41	5	3
⑦	28.05.11	2	B	19	伊藤 II	66	44	8	6
⑧	28.05.12	6	B	19-21	伊藤 II	66	44	8	6
⑨	28.05.13	2	B	24-25	伊藤 II	66	44	8	6
⑩	28.05.15	1	B	25	伊藤 II	66	44	8	6
⑪	28.09.03	10	B	38-42	伊藤 II	66	44	8	6
⑫	28.10.02	15	B	45-51	伊藤 II	66	44	8	6
⑬	28.10.31	3	B	64-65	伊藤 II	66	44	8	6
⑭	30.04.10	11	C	41-47	松方 II	68	46	10	8
計		116	←間の白紙 5 頁は外数			年齢は数え			

\*和装本ではあるが、頁換算した。

照合史料

A 刊本

『明治聖上と臣高行』（原著：自笑会／1928 年）

津田茂磨著 原書房 1970 年

「- 抜書」との同一性

少し異なる

B 刊本

『佐佐木高行日記 かざしの桜』

安在邦夫、望月雅士編 北泉社 2003 年

ほぼ一致

C

宮内史料館所蔵史料（和装・写本）デジタル公開中

「佐々木高行日記抄慶応 3.1.4- 明治 38.1.12」40 巻

識別番号 36894

津田茂磨編

成立年：大正

完全一致